
仮面ライダーディバイン

S T 2 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディバイン

【Nコード】

N1155Z

【作者名】

ST20

【あらすじ】

『ディケイド』によって救われた筈だった9つのライダーの世界。その世界はある存在の介入で再び滅びを迎えようとしていた。危機を感じた紅渡は、対抗するための新たなライダーを派遣した。神の名を冠するライダーである存在の掃討者・ディバイン。いくつもの世界を巡りその瞳は何を写すのか…。
(作者が学生であるため、更新が不定期になる可能性が非常に高いです。ご了承ください。)

プロローグ（前書き）

この小説は、ディケイドから仮面ライダーにハマりだした学生が執筆する二次創作作品です。

二次創作が嫌いだという方は前のページへお戻りください。

初投稿になりますが、めちゃくちゃ短い駄文ですが、あくまでプロローグですので

どうか大目に見てください。

プロローグ

ここは至って平凡な普通の世界。仮面ライダーや怪人は存在しない。それどころか異質なものが全くと言っていいほどない世界。そんな世界に一人の青年

はいた。常人とは違う“ある力”の持ち主。

その力は、想像したものを創造する力。頭の中で思い描いたものを手の平から具現化することができる、

まるで神様のような力。とは言っても、すでに現実存在しているものでなければ作れない上に、

“命”や“金銭的価値の高いもの”などは作れない、小さな力。

しかし、たったそれだけでも常人から見れば異質である。それ故、彼は孤独だった。

そんな境遇で育ちながらも、彼は誰にでも優しくかった。

どれだけ他人から拒絶されても中傷を受けてもなお、性格が歪みはしなかった。

いつでも他人が優先だった。もはやお人よしのレベルではない。

彼は、高校を出てすぐに、世界を巡る旅に出た。

4年後のある日、彼は故郷に戻ってきた。そしてその日、破滅が世界を襲った。

突如として、白い怪物が現れた。それは二足歩行で人型だったが、人間ではないことはだれの目にも明らかであった。

それは大地を割り、建物を壊し、人を殺した。

ただ見ているわけにもいかず、彼は銃や大砲などの兵器で応戦したが、

それは傷一つついていない体で平然と立っていた。

怪物が何か言っているのが聞こえた、と同時に彼の体は切り裂かれた。

大量の血が失われていくのが自分でもわかるほど急速に、彼の命の炎は消えた。

たった一つの存在により、この世界は…滅びた。

プロローグ（後書き）

短いプロローグ読んでいただき誠にありがとうございます。

誤字脱字や文章のおかしな点・改善点などがございましたら、感想でのご指摘ください。

なお、仮面ライダーが絡むのも、主人公の名前も次回からになります。

第1話 旅の始まり

真つ暗な空間。しかし闇ではない。そこにはただ何もなければいいだけである。

そんな場所に男がいた。旅人のような風貌をして横たわっている黒髪の青年と

それを眺めている白装束を着た茶髪の青年の二人である。

横たわっている、とは言ったものの地面に直接倒れているのではなく、

目には見えないベッドの上に寝かされているという表現のほうが正しいだろう。

黒髪の青年は体が完全ではないらしい。その証拠に彼の腕や脚は部分的に透けているように見えた。

茶髪の青年はその治療をしているようだった。

しばらくして黒髪の青年の体が完全に修復された。茶髪の青年はそれを確認すると人差し指で天を指した。すると幾つもの“地球”が上方に浮かび上がった。

それらの“地球”は難解な文の羅列へと変換されていき、黒髪の青年に引き寄せられるように移動し始め、頭の中へと吸収されていった。

その途中で黒髪の青年はうつすらと目を開け体を起こした。それと同時に作業が終わった様で、目の前に立っている茶髪の青年に向かって尋ねた。

「今、何をした？」

「あなたを修復しました。」

「俺は死んだはずでは？」

「ええ、確かに一度あの世界の崩壊に伴いあなたも消滅しました。実際の死因は切り裂かれた傷からの多量失血ですがね。」

「なら…どうして俺は生きている？」

「あなたにやつてもらったことがあるからです、かぜもとしゅう風本秀さん。その為に必要な知識は先ほどあなたの脳に刻ませてもらいました。」

黒髪の男の名は風本秀と言った。あの時人々を守るために戦い、怪物に切り裂かれて死んだ筈の青年である。生きているのは体を修復されたから、だそうだ…。

「なるほど、だから記憶した覚えのない知識が頭の中にあるのか。そう言えば、君は何ていう名前なんだ？」

「僕は紅渡——くれないわたる——仮面ライダーキバです。」

茶髪の青年はそう名乗った。

「仮面ライダー…。初めて聞く筈の単語なのに知識があるなんて変な感じだな。それで、俺に何をしろと言うんだ？」

「『ディケイド』の旅したクウガの世界をのぞく8つの世界にまたしても滅びが訪れようとしています。その危機をあなたに救ってもらいたいのです。」

「わからないな。何故経験もあり、特に手間のかからないディケイドではなく、圧倒的に経験不足で一度は完全に死んだ俺なんだ？客観的に考えてもディケイドのほうが適任だと思っただけだ。」

「当初はそうするつもりでした。ですが、再生されてからさほど時間の経っていない、完全に安定のしていない状態のあれらの世界に本来“世界の破壊者”であるディケイドの介入は避けるべき。したがって、僕は僕の仲間と『ディバイン』のシステムを作りました。」

「『ディバイン』？なんだそれ？」秀は頭の中の知識にもない単語に首を傾げながら、尋ねた。

秀への回答としてなのか、紅渡はそのまま言葉を続けた。

「ディバインというのは、あなたの世界を滅ぼした怪物…聖獣（クロスイーター）を倒すためのライダーシステムです。」

「聖獣、あの白いヤツのことか…あれは相当強かった。」

「あなたの世界を滅ぼしたのはAクラス以上の個体ですから、生身ではまず勝てないでしょう…。Bクラス以下の個体ならある程度の戦闘能力があれば倒せるのですがね。」

「クラスというのは強さの段階か？」

「ええ、体にある（にじゅうまる）の形をしたマークの数によりC3・C2・C1・B3・B2・B1・A3・A2・A1・Sの10段階に分けています。」

「てことは、俺が会ったアイツはマークが8つ…A2クラスってどこか？」

「そうなります。ただ…」

渡が何かを言いかけたところで銀のオーロラが発生し、そこから長身の男が現れた。

「おい、渡。お前話さないときは説明不足になるくせに、いざ説明するとなると話が長いぞ…。もっと簡潔に説明できないのか？」男は文句を言っていたが、渡は特に気にしていないようで男に話しかけた。

「剣崎さん、あなたが来たいことは調整が終わりましたか？」

男は剣崎けんざきというようだ。

「ああ、調整は終わった。…おまえが風本秀だな？」渡の問いに答

えた後、剣崎は秀のほうに視線を向けそう尋ねた。秀が頷くと、言葉が続けた。

「お前にはデイベインシステムの使い方を覚えてもらう。そのついでに実戦のテストもする。ついてこい。」

それについて秀が承諾すると、再びオーロラが発生し、剣崎と秀はその場から消えていた。

「頼みましたよ、風本さん…。」一人残った渡はもうここにはいない秀に向かってそう呟いた。

〃
〃
〃

オーロラを抜けると、鍛練場の様な場所に着いた。

近くに剣崎が見当たらず、秀があたりを見渡していると、前方から何かが飛んできた。

反射的に掴み、それをよく見てみると鳥の形をした機械であることが分かった。

『それがデイベインドライバー、これからのお前の力だ。』
「なっ!？」

『何を驚いている、デイベインドライバーには通信機能があることを聞いていないのか?』

「旅の目的は聞いたけど、機能については何も聞いてない。」

『成程、あの(・・)渡だからな…。まあ、デイベインシステムに

ついて簡単に説明すると

- ・変身の手順はディケイドと同じ
 - ・変身回数に制限あり
 - ・渡、剣崎との通信機能付き
 - ・カブトゼクターのような自動駆動及びジョイント移動の可能
 - ・ディバインへの変身時は使えるカードの枚数に制限あり
- といったところだ。」

「……ちょっと待て。そんなに制限があるのか？聖獣が大量発生でもしたらどうするんだよ！生身で戦えって言うのか！？」

『もちろんだ。』

「人ごとだと思って…。それでどうすればいい？ディバインになればいいのか？」

『いや、最初は生身で、しばらくしたら変身状態で実戦訓練を受けてもらおう。相手はそいつらだ。』

「そいつら？」

またしてもオーロラが発生し、そこから複数の怪人が現れた。

『データから作った怪人だが、強さは本物と変わらない。レベルにもよるが油断したら死ぬと思え。』

「わかった。最初は生身で、手順はディケイドと同じ、だったな…。」

「言われたことを確認し、秀は腰にディバインドライバーを当てる。

するとベルトが展開し装着を完了した。続いてベルトの右側にあったカードホルダーから取り出したカードを開いたバツクルに入れる。

『Weapon Ride DIVINE SWORD!』

ドライバーから特殊な機械音声が聞こえると、秀の手元に大剣…ディバインソードが出現した。

「武器を召喚できるのか。よく出来てるな…。」そう言いつつもバツクルを開き、更にカードを装填、

「Attack Ride SLASH」で刀身を強化すると、近くにいたワーム（サナギ体）から斬り倒し、そのまま流れるような

動きで次々に怪人を斬っていく。弱い個体しかいなかったのか、たったそれだけの攻撃で爆散した。

『よし。次は変身して戦ってもらおう。』

剣崎がそう言うと、ナスカ・ドーパント（以下ナスカ）とRナスカ・ドーパント（以下Rナスカ）が現れた。

「レベル上がりすぎてないか…。」

『いや？これぐらいで丁度いいくらいだ。』

「ああ、そうかい。…変身！」

『K a m e n R i d e D I V I N E ! 』

秀はバツクルにライダーカードを装填し灰色のオーロラを纏うと、六角形を描くように六つの像が展開し、それらがオーバードラップしながら重なる。3枚のライドプレートと呼ばれる板が氷の形を刻むように頭に刺さると、銀と黒をメインとしたボディに赤色の複眼、背には先ほどの大剣を持った神の名を冠する仮面の戦士…『仮面ライダー・ディバイン』が誕生した。

ディバインは向かってきていたナスカをカウンターの要領で殴り飛ばすと、背負っていた剣を抜き、バツクルにカードを装填。

『A t t a c k R i d e S O N I C B O O M ! 』

ディバインが剣を振るうと円弧状のエネルギーの刃が飛び、Rナスカを遠距離から強襲…反応が遅れたのかその攻撃は直撃したが、まるでダメージを受けていないかのように立て直し、2体同時に超加速能力を発動した。

『S k i l l R i d e K U U G A P E G A S U S 』

新たにカードを装填すると、ディバインの右側に仮面ライダークウ

ガ・ペガサスフォームの姿が映し出された。それはデイバインに向かつて動き出し、それが完全に重なると右肩にクウガのライダーマークが緑色で浮かび上がった。

『Attack Ride SHOCK WAVE』

また別のカードを使用すると、タイミングを計り、勢いよく地面に剣を突き刺した。

その地点を中心とした衝撃の波が、かなり接近していた2体の動きを止めた。

「よし、これで終わりだ！」

デイバインは、先ほどまでとは違うデイバインのライダーマークが描かれた黄色のカードを取り出し、装填した。

『Final Attack Ride D-D-D-DIVINE!』

スクラッチ調の音声が鳴り響くとホログラム状のカードが複数現れ、それによりナスカとR・ナスカを拘束した。カードに向かってデイバインソードを振り払うとエネルギーの刃が出現した。カードを通り抜ける度に巨大になったそれは2体のドーパントを貫くには十分な威力を誇り、この戦いはデイバインの圧勝という形で終了となった。

〃
〃
〃

変身を解いた秀は、オーロラ移動でやってきた剣崎と合流した。

「お前は生身でも相当強い様だな。」

「そうか？ワームのサナギ体やマスカレード・ドーパント、それに白ヤミーの集まりなら装備がちゃんとしていれば人間が倒すのは難しくない…。むしろあれより強い相手とも生身で戦えるくらいでなければ、装着者を探すのに苦労なんてしないだろう？」

「ほう…そこまで理解していたのか。ならば追加の説明をしなくとも問題ないだろう。何事も実体験に勝るものはない。あとは現地でどうにかすればいい。」

「旅は目標もだけど、まずは楽しむものだと思っているから異論はない。けどどうやって世界を渡るんだ？」

「デイベインのバイクに目標を達成した時のみ世界を渡れるようになる機能が付いている。若干変な感覚になるらしいが、後は慣れだ。」

「剣崎が若干適当になってきているが、秀は気にしていないのか、いつの間にか装着したデイベインドライバーにカードを入れた。」

『Weapon Ride MACHINE DIVINER』

機械音と共に、銀色を主体としているからかデイクイドのものよりも奇抜に見えないバイク…マシンデイベイナーが現れた。

「本来なら俺達が動くべきなんだがな…。」

「…俺は生き返らせてもらいましたし…恩返しも兼ねてですよ。じゃ、もう行きますね。」

そう言うと、秀はバイクに跨り走り出した。剣崎から大分遠ざかる

と、オーロラによって秀は別世界へと旅立っていった。

秀の長い旅はまだまだ始まったばかりである。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

第1話 旅の始まり（後書き）

なんとか投稿しましたが、本編に入ったにもかかわらず文字数が約4500という少なさ…。描写をもっと細かくするべきでしょうか？もしかしたら剣崎や渡のキャラがおかしかったりするかもしれない…。

文章やキャラの改善点などがございましたら、お気軽に感想欄の悪い点に書き込んでください。

批判・中傷でなければ、何を書いてもかまいません。

次回はクウガの世界を飛ばして、キバの世界からTV版ディケイドと同じ順序で回ろうと思っています。この通り、文字数少なくせに更新が遅い作者ですから、響鬼の世界に行くのはいつになることやら…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1155z/>

仮面ライダーディバイン

2011年12月27日01時49分発行